

第 17 回日本在宅医学会もりおか大会 一般・指定演題

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	湘南いなほクリニックにおける医学部 2 年生への在宅医療教育
演者名	井上祥 1) 2) 内門大丈 1) 浜本史子 1) 和泉俊一郎 3) 飯田洋 2) 稲森正彦 2)
所属	1) 湘南いなほクリニック 2) 横浜市立大学 3) 東海大学

目的

教材としての在宅医療にはプライマリケア、高齢者医療、コミュニケーションなど様々な要素が含まれ、これを Early exposure で学ぶことの意義は大きいと考えられる。湘南いなほクリニック (以下、当院) では横浜市立大学と協力し、On the Job Training による卒後教育を提供してきた。当院では平成 25 年度より東海大学医学部 2 年生の受け入れを開始し、在宅医療の卒前教育プログラムの提供を試みた。

実践内容

平成 25, 26 年度の 2 年間にわたって東海大学医学部 2 年生の「人間関係学」の一環として年度あたり 2 名, 合計 4 名を対象とした 4-5 日間の在宅医療実習を実施した。実習は施設への訪問診療に同行し、施設利用者、家族、職員と実際に対話をする形式で行われた。当院医師の指導の下、実際の診療にも参加した。高齢者とのコミュニケーションを理解する上では必須と考えられる認知症外来の見学を実習内容に含めた。実習前後には Visual Analog Scale (VAS)、選択式、自由記載式を用いたアンケートが実施された。

実践効果

VAS(100mm)では「在宅医療の理解」で+40mm の変化がみられた。また、自由記載式の回答では「医療の根本である患者さんとの向き合い方、患者さんのニーズにこたえろといった深いところを学ぶことができた」「往診という形で多くの施設、多くの入居者の方たちとコミュニケーションをとれた」「総合病院とクリニックの比較をすることができた」などがみられた。

考察

今回、在宅療養支援診療所で医学部 2 年生の実習を行うという東海大学の新しい試みに参加した。「福祉施設と密に連携している小規模の診療所」「認知症研修施設」など当院の特色を生かし、学生が「地域医療における在宅医療の役割」を学習できたことが推測された。Early exposure において在宅医療を学ぶことは、地域全体を見るというマクロな視点や多様性を学ぶ意味で、在宅医療、プライマリケアに進む者だけでなく、高度医療の担い手になる者にとっても有意義な可能性がある。